



わが子のように思えんかったら、  
いいものは実らん。

「梨づくりは、ほんとうに奥が深いです」

30余年この仕事に携わっている山田博子さんは言う。これ  
でいい、という到達点は見当たらず、「さらにいいものを  
生むには、もっと工夫があるのではないか」といつも思う。  
梨づくりは、この地に嫁いで末の娘が生まれたのを機に  
始めた。右も左もわからない。

義父に教わり、毎日ひとつでもいいから覚えて身につけよう、  
と必死だった。山を切り拓いて畑を作るところからの歴史  
がある義父は、あるとき、さりげなくこう言った。

「梨がわが子のように思えんかったら、いいものは実らん」

この名言、いまも胸の奥に刻まれている。

樹を隣同士でつないで1本にし、作業性をあげるだけで  
なく樹がお互いに助け合うという利点もある「ジョイント  
栽培」や、1個ずつ袋をかけた梨園全体に大きな蚊帳<sup>かや</sup>  
を掛けるような「網掛無袋栽培」など、新しい試みにもどん  
どん取り組んでいく。そうした意欲は「私、梨が大好きです。  
どんな種類でも……」という、子どもときからの無類の梨  
ファンゆえに生まれるのだろう。

中学生たちの体験学習を引き受けることもあって、熱心に  
説明すると、大人びた感想文をもらったりする。「これほど  
大変な仕事だとは思いませんでした。ご苦労がよくわか  
ります」

読めば、やはりホロリとくる。

指導農業士  
山田博子



ゆ  
う  
ゆ  
う、

ゆ  
り

は  
ま